ジャイナ教と仏教⑩

ジャイナ教はなぜ分裂したのか？

——教団分裂とその後の展開

堀田和義

これまでにも何度か触れたように、ジャイナ教には白衣派と空衣派という二つの大きな宗派がある。今回は、ジャイナ教教団が分裂するに至った経緯や両宗派の相違点、その後の展開などを、仏教と比較しながら紹介したい。

教団成立から分裂まで

ジャイナ教は、マハーヴィーラの両親が信者であったとされるパールシュヴァの教団を吸収合併するような形で成立したと言われている。そのため、パールシュヴァはジャイナ教第二十三代祖師に、マハーヴィーラは第二十四代祖師に位置付けられている。マハーヴィーラには「ガナダラ」と呼ばれる十一人の高弟がおり、彼らやその後継者たちが開祖亡き後の教団を指導した（第四回参照）。

白衣派の伝承では、ジャイナ教教団には八回の分裂があり（うち二回はマハーヴィーラ在世中）、最後の分裂で空衣派が現れたという。初期仏典の『長部経典』「浄信経」は、マハーヴィーラ入滅後の分裂に触れている。両派がその後さらに分裂するのは、仏教が根本分裂を経て様々な部派へと分裂していったこととよく似ている。

また、空衣派の伝承は、次のように伝えている。紀元前三百年頃、インド北東部のマガダ地方で飢饉が発生したため、バドラバーフ率いる教団の一部が南へ避難した。バドラバーフは南の地で亡くなったが、彼に従う者たちがマガダ地方へ戻って来ると、不在の間に正典が成立し、衣の着用が習慣化していた。このような見解の相違がもとで、マガダ地方に残った者たちが白衣派、南から戻ってきた者たちが空衣派になったという（第四回参照）。

ただし、白衣派は、当時バドラバーフはネパールにいたと主張し、このような伝承を認めない。彼らは、紀元八十二年に、シヴァブーティという僧侶がラタヴィーラプラで裸形に関する規則を打ち立てたことで分裂が起こったとも言う。他にも、空衣派には、インド北西部のヴァラビーで腰巻をつけていた僧侶たちが、王から白衣を身に纏うよう求められて白衣派が成立したという伝承も

ある。実際の分裂の経緯は明らかでないが、考古学的資料などにより、二〜五世紀の間に、別々に生活しているうちに徐々に分かれていったと考えられている。

両宗派の相違点

ジャイナ教の白衣派と空衣派の教義の違いは、仏教の諸部派・宗派間におけるものに比べて小さいと言われる。両宗派の大きな相違点は、次の四点にまとめられる。

一点目は、先にも触れた衣の着用に関する問題である。白衣派の原語「シュヴェーターンバラ」は「白い衣を身に纏う者たち」を、空衣派の原語「ディガンバラ」は「方位（空間）を衣として身に纏う者たち」を意味するように、前者は衣の着用を認め、後者は認めない。これには無所有の誓戒が大きく絡んでいる。仏教でも糞雑衣（ふんぞうえ）が勧められ、衣への無執着が説かれたが、着衣か無衣かという二者択一へ向かうことはなかった。

二点目は、白衣派聖典の権威に関する問題であり、これも先に触れた。空衣派では、古い教えは失われてしまったと考え、白衣派聖典の権威を認めない（第四回参照）。

三点目は、一切知者の性質に関する問題である。ジャイナ教の一切知者は欲望を克服した超人的存在であるが、空衣派ではそれを文字通り受け止め、欲望などの生理的作用がなく、世俗的な事柄にも関わらないと考える。一方、白衣派は現実的な立場をとり、生理的作用などの人間的側面を認める。同様の議論は仏教にも見られる。大乗仏教では、ブッダは苦しみを克服したはずなのに、なぜ最晩年に身体的苦痛が生じたのかといった点が問題にされた。

四点目は、女性の地位に関する問題である。白衣派では女性も解脱可能と考え、第十九代祖師マッリが女性であったと考えるが、空衣派では、女性は男性に生まれ変わらなければ解脱できないと考え、『法華経』の変成男子説を思わせる（第五回参照）。

紀元五百年頃の南インドには「ヤーパニーヤ派」と呼ばれる第三の宗派が存在したと言われる。この宗派は、森では裸形を実践し、人前では腰巻を身につけるという折衷的な立場をとっていた

鈴木大拙〔没後50年〕
未発表論攷 本邦初訳
小林圓照監修：東西霊性文庫

アジアの社会倫理の底流と仏教思想〈英文対訳〉 最新刊
❾ 孔子や老荘、華厳や禅の思想を読み解き、現代社会の道徳的実践に不可欠な「内面の促し〈インナー・アージ〉」に耳を澄ます 2,000円＋税

妙好人、浅原才市を読み解く〈英文対訳〉
❽ 他力は自己の外ではなく内にある 1,250円＋税

無量光・名号〈英文対訳〉
❼ 現今の日本人にも必読の「自己探究」の書 1,480円＋税

原発 瞬楽永苦
日本社会のエートスと仏教の位相
島崎義孝 最新刊
東西霊性文庫⑩ 現代の一禅僧が編んだ「核」問題のバイブルとして日本人必読の書。経済第一主義のもと、原発に夢を託し続けてきた日本。いま、それは一人ひとりが背負う十字架となる 2,400円＋税

ブッディスト・エコロジー 好評図書
共生・環境・いのちの思想
竹村牧男
『読売新聞』→で紹介！
3,000円＋税
※デバイスによっては正確に表示されない場合もあります。

図書出版 ノンブル社
東京都新宿区西早稲田 1-8-22-2F
Tel.03-3203-3357 Fax.03-3203-2156
http://www.nonburusha.co.jp/

が、その他の点については白衣派と同様の見解をとっていた。そのため、空衣派からは白衣派寄りと見なされていたが、最終的には空衣派に吸収されたと考えられている。

白衣派の展開

現在の白衣派は、地域という点から見ると、グジャラート州、ラージャスターン州、パンジャーブ州といった西北インドを拠点としている。これはジャイナ教を保護したマウリヤ王朝が紀元前二世紀頃に衰退した後、マガダ地方からガンジス川沿いに西へ移動した者たちに起源があると考えられる。仏教徒も同時期に、同じ事情によって保護者を失い、各地へ移動したと考えられている。

中世の白衣派では、寺院などに定住する出家修行者が現れては、それに対する改革を唱える者たちが現れるということが繰り返された。また、出家修行者ではなく、ローンカー・シャーのような在家信者から起こった改革も見られる。彼は写本の書写者であったが、出家修行者の定住の根拠が聖典にないことに気付いたのがきっかけであった。

現在の白衣派は、尊像崇拝を認め（寺院を有す）る立場と認めない立場の二つの立場に大きく分けられ、後者は僧堂を有するかどうかでさらに二つの派に分けられる。

前者はムールティ・プージャカ派（「尊像を崇拝する者」の意）で、後者はスターナカ・ヴァーシン派（「僧堂に住する者」の意）とテーラーパンタ派である。スターナカ・ヴァーシン派の名前は、寺院を持たないかわりに、出家修行者が滞在する僧堂（スターナカ）を有することに由来する。一方、テーラーパンタ派は、そのような僧堂の所有と無所有の誓戒との矛盾に疑問を感じて、スターナカ・ヴァーシン派を離れた者から生まれた。この派は尊像崇拝を認めないだけでなく、僧堂も持たないため、遊行中の出家修行者は在家信者の家や巡礼者用の宿泊施設などを利用する。

空衣派の展開

現在の空衣派は、地域という点では、マハーラーシュトラ州南部、カルナータカ州、北・中部インドの都市部に多い。先に述べたのと同じ事情でマガダ地方を離れ、別のルートを通って南へ移動した者たちに起源があると考えられる。

中世の空衣派でも出家修行者の寺院定住化が進み、「バッターラカ」と呼ばれる聖職者を中心とした組織ができあがっていた。また、イスラームの圧力などもあって、裸形の伝統は失われていた。そのようななか、ターラン・スヴァーミー（十五～十六世紀）が晩年に出家修行者となり、生涯にわたる裸形を実践して、定住化した者たちや尊像崇拝を批判した。また、十七～十八世紀に北インドの都市部に住む在家信者たちのグループから起こり、形骸化した儀礼などよりも個人の霊的な変容に重きを置いたアディヤートマ運動も、旧来の体制を批判し、両宗派の在家信者を惹きつけた。アーグラーのバナールシーダースは、その運動を代表する人物のひとりとして知られる。

現在の空衣派は、北インドでは、バッターラカの権威を認めるビーサパンタ派とそれを認めないテーラーパンタ派（白衣派のテ

ーラーパンタ派とは別で、先述のアディヤートマ運動から生まれた）に大きく分かれる。その他にも、インド中部のマディヤ・プラデーシュ州を中心とするターラン・スヴァーミー・パンタ派、インド北西部のラージャスターン州ジャイプルのグマーン・パンタ派、同じく北西部のグジャラート州でラージャチャンドラの教えに従うカヴィ・パンタ派、カーンジー・スヴァーミー・パンタ派といった小さなグループが見られる。また各宗派の開祖のうち、ターラン・スヴァーミーはインドの宗教家ラジニーシに、またラージャチャンドラはインド独立の父ガンジーに影響を与えたことで知られている。

ジャイナ教も分裂を繰り返したが、仏教の分裂に比べると穏やかであったのは、インド北西部に白衣派、南部に空衣派というように、地域的にある程度かたまっていたことも大きく影響していると考えられる。

インド国外への進出

ジャイナ教は仏教とは異なり、インド国内で伝統が途絶えなかったが、その他の地域にはほとんど普及しなかった。一方、仏教はインドで衰退してしまったが、アジア各地に広く展開した。

ただし、現在はインドでも、不可触民解放運動で知られるアンベードカルの流れを受けたいわゆる新仏教徒が急増しており、インド全人口の〇・七パーセント（二〇一一年の国勢調査による）を占め、ジャイナ教徒の〇・四パーセントを上回っている。また、グローバルな時代を迎えると、チベット仏教の影響などもあって、仏教はヨーロッパやアメリカなどにも広まった。

ジャイナ教の商人も世界各国で活躍しており、彼らが住む地域にはコミュニティが形成されている。日本でも、宝石を扱うジャイナ教の商人が神戸市（兵庫県）、御徒町（東京都）、甲府市（山梨県）などに集まっている。ただし、出家修行者の海外渡航が困難なこともあり、これらは現地在住のインド人在家信者のコミュニティという側面が強い。そのため、インド国外での新たな信者の獲得には繋がっていないようである。

これまで十回にわたる連載において見てきたジャイナ教の教えの中でも、不殺生や無所有の教えなどは、動物倫理や環境問題をはじめとする現代的な問題にも様々な示唆を与えてくれる。また、極端に偏ることのない多面主義的真理観も、今まさに必要とされている宗教的寛容を考えるうえで極めて重要なものである。このようなジャイナ教の思想が世界に広がり、多くの人々に知られることを期待して、この連載を終えたい。（了）

ほった・かずよし▼大谷大学真宗総合研究所特別研究員。ジャイナ教。■

ISSN 1343-6198
平成28年12月25日発行
毎月1回25日発行
No.585

春秋 Shunjū 2017 1

巻頭エッセー 宗教改革五〇〇年と日本語版《ロ短調ミサ曲》 大村健二 1

高齢期医療をめぐる経済学的視点 蔵 研也 5

モーツァルトの青春 断想5 塩山千仞 9

音楽家の遺品がくれる夢 上田泰史 12

乃木希典の殉死と軍旗の神聖化
大正・昭和前期の宗教と社会❹ 島薗 進 16

三項図式の中の風表現 インド〈風〉曼荼羅❹ 高橋 明 20

小説と生命 〈いのち〉でたどる東洋思想❾ 小倉紀蔵 24

ジャイナ教はなぜ分裂したのか?
――教団分裂とその後の展開 ジャイナ教と仏教❿完 堀田和義 28

京都十景⑩ 弥次さん、喜多さんも驚いた京の着倒れ 完 鳥居本幸代

春秋社